

古ヒンディー文学研究合宿



海外交流

長崎 広子*

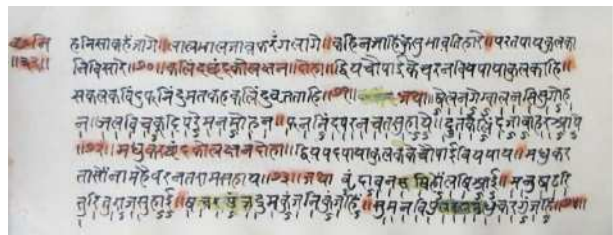
Braj Bhasha / Early Hindi Workshop

Key Words: Hindi literature, Braj Bhasha, India, Bhakti

毎夏およそ 30 名強の世界中の古ヒンディー文学研究者が一堂に会して 10 日間の研究合宿が開催されている。Braj Bhasha / Early Hindi Workshop、通称ブラジ・キャンプは、今日では世界で第 4 位の話者人口を有するインドの連邦公用語であるヒンディー語の古典文学の研究会である。当該分野を代表する研究者がボランティアで講師をつとめ、自らが現在研究しているテキストを講読する。ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国、カナダ、インド、中国、日本の、この分野の権威から大学院生までが同じ宿舎に泊まり、まさに寝食を共にする 10 日間である。これまで東欧を中心に 7 回開催されてきたこの合宿は、2021 年夏に大阪大学での開催が予定されている（追記あり）。

ヒンディー文学研究

日本の総合大学のなかでは唯一、大阪大学は外国語学部にヒンディー語専攻を有する。日本での知名度は高くないが、ヒンディー語は多言語社会インドで連邦公用語としてインド憲法第 343 条に位置づけられており、インド国内にとどまらず、インドにルーツをもつ人々も世界中で使用する、話者数でいうと日本語よりはるかに多い非常にメジャーな言語である。本国インドでは英語にその地位がおされがちであるが、ヨーロッパやアメリカの大学でヒンディー語を学ぶ学生は多い。教育面では運用能力を重視した語学の習得が中心であるが、最近特に盛んになった古ヒンディー文学研究について本稿では紹介したい。



ブラジ・バーシャーの写本

ヒンディー語は萌芽期を含めるとおよそ千年前から存在するともいわれるが、文学活動が確立するのは 600 年ほど前からである。14 世紀ごろから 17 世紀ごろまではヒンディー文学史上バクティ文学期とよばれる黄金時代で、ヒन्दゥー教の熱烈信仰バクティの宗教詩が多く生み出された。先に触れたブラジ・キャンプとは、バクティ文学期に主たる文語であったヒンディー語方言ブラジ・バーシャーと古ヒンディーの文学を研究する合宿である。ムガル帝国が拠点としたアーグラ（タージ・マハルで有名な北インドの都市）などを含む地域はブラジ地方と



* Hiroko NAGASAKI

1967年4月生まれ
 インド アーグラ・アンベードカル大学 (Ph.D. 課程)
 現在、大阪大学大学院言語文化研究科
 言語社会専攻 准教授 Ph.D. in Hindi
 専門/古ヒンディー・バクティ文学研究
 TEL : 0727-30-5291
 FAX : 0727-30-5291
 E-mail : nagasaki@lang.osaka-u.ac.jp

呼ばれ、ブラジ・パーシャーはその地域の言語である。ムガル帝国が同地域を支配し、ヒンドゥー教とイスラム教の文化が混淆して新たな文学活動が生まれた時代、それがバクティ文学期であった。ヒンドゥー教のクリシュナ神の生誕地がブラジ地方とされることから、ブラジ・パーシャー文学にはクリシュナ信仰文学が多いが、神を姿形のないものと捉える無属性派の内省的な宗教文献なども数多く生み出された。

このキャンプで扱うのは、ブラジ・パーシャーだけでなく古ヒンディーやそれと関連する言語の文学全般である。インドの古典サンスクリットや現代ヒンディー語のように体系化された文法が古ヒンディーにはない。それはテキストごとの独自性が強いいため、汎用性のある体系化された文法が記述できなかったからであるが、ブラジ・キャンプはさまざまなテキストをその道の専門家が講読することにより、この問題に風穴をあけた。



国と年齢とキャリアを越えて研究者と学生がともに学ぶ場

ブラジ・キャンプはルーマニア出身の現オックスフォード大学の Imre Bangha 准教授とコロンビア大学の Alison Busch 准教授が中心となって進められてきた。東欧（ルーマニア、ブルガリア、チェコ、ポーランド）を中心にこれまで開催地が選ばれてきたのは、物価が安く若手研究者も安心して長期間滞在できるからで、かつてはインドから研究者をアドバイザーとして招待していたこともあったが、経済成長著しいインドでは今では大学院生でも自国からの資金援助を受けて参加するようになっている。2019年度はロシアのサンクト・ペテルブルグで開催され、同地出身の Tatiana Oranskaia 博士（ハンブルグ大学）が世話役となり Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences

がホストであった。宿泊費を抑えるためにペテルブルグ郊外の Gatchina のホテルを合宿場とし、Imre Bangha（オックスフォード大学）がヒンディー語の祖先ともいえる最初期の西部方言によるジャイナ教写本、Linda Hess（スタンフォード大学）と Jaroslav Strnad（Oriental Institute, チェコ）が共同で無属性派詩人カビールを、Monika Boehm-Tettelbach（ハイデルベルク大学）がナート派文献、Dalpat Rajpurohit（テキサス大学）がダートゥーパント派の詩人スンドルダース、Alexandre Elizariev（ソフィア大学）がシク教經典の『アーディ・グラント』の講読を行った。また学生のセッションでは、大学院生（シカゴ大学、ローザンヌ大学、ゲント大学等）が博士論文で扱っているテキストの一部を全員で講読し、学生にとってはその道の権威から直接アドバイスをえられる貴重な場となっている。

50 時間を超える講読では、全員が着席順に英訳しながら討論する。ヒンディーといっても、地域や時代や宗教的な差があり、文法やスタイルは作品ごとに多様である。さまざまなテキストを日本の授業では考えられないスピードで読むため、初めて参加したときにはただただ驚いた。テキストの難度は極めて高く、毎回代わる講師がはりきるために読むテキストの量は毎年増え続けている。講師本人がインドで写本を発見し、そこから書き起こしたテキストを使うことが多いため、初めて見る言語と文体にはその道〇年のベテラン研究者でも悩まされることになる。朝 9 時半に授業はスタートし、途中昼食とお茶の休憩をはさみながら午後まで授業が続く。それが終わると町に繰り出し、ビールを飲みながら気の合う仲間と次の予習をする。夕食後も次の予習の誘いがきたり、予習した部分をシェアしてほしいとメールがくるので、夜中まで予習して、朝起きて朝食をとった後も授業が始まるまでまた予習をする。テキスト講読漬けの 10 日間である。疲れがたまって帰国前には体調が悪くなるのだが、ほかの参加者は驚くほど元気で、終了後に脳内で沸き起こる達成感や半端でなく、また次回に向けて気持ちが奮い立たされる。

合宿中は、数日おきに授業を午前中で切り上げ、滞在地の近くの観光名所に皆と出かける。ペテルブルグではエルミタージュ美術館やピョートル大帝の



離宮ペテルゴフなどの美しさに圧倒された。また、ホストであった古文書研究所である Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences には貴重なインドの写本が保管されており、ちょうどテキストとして取り上げられていたシク教経典『アーディ・グラント』の豪華写本を閲覧することができた（上掲写真）。

またインド領事宅に招かれ、専属料理人によるインド料理が振舞われるという粋なはからいもあった。インドからの参加者以外にも、アメリカやヨーロッパの大学院生にはインド系移民やインドからの留学生も多く、合宿中の最大の不満は料理になりがちである。インド料理が恋しいというだけでなく、参加者のほとんどが菜食主義者のため、肉料理中心の東欧の食事が肉抜きで提供されるのだが、菜食の献立



に慣れていないためかバラエティに乏しい。宗教や人種や文化の異なる人々が集う国際交流の場における永遠かつ最大の課題は、食事の満足度を上げることではないかとさえ思われる。

この合宿をきっかけに親しくなった研究者とは研究プロジェクト等でさらにつながっていく。研究以外でもインドのジャワーハルルール・ネルー大学と学生交流協定を結びお世話になっているのだが、ネルー大学のコンタクト・パーソンの Raman P. Sinha 教授と知り合ったのも 2014 年にブルガリアの Bansko で開催されたブラジ・キャンプであった。

大阪大学開催のブラジ・キャンプへむけて

筆者はブラジ・キャンプに参加し古ヒンディー文学の言語と宗教と文化の多層性を学ぶとともに、2017 年には講師としても古ヒンディー韻律書の講読を担当した。合宿の参加者は「ブラジ・ファミリー」と呼び合うほど一体感が強く合宿の最終日に次の開催地を皆で話し合うのだが、2020 年度は Biljana Zrnica (Oriental Institute, チェコ) がクロアチアで開催し、2021 年度のホストを筆者が大阪で引き受けることになった。ベジタリアン料理の手配、皆が泊まれる学内宿舎の確保などの予定を立てていたところに、予想もしなかったコロナ・ウイルスの世界的大流行が発生し、海外への移動ができなくなった。今年度のクロアチアのキャンプを 1 年延期し、大阪では 2022 年に開催する可能性が高まっている。いずれにしても初めてアジアで開催される大阪のブラジ・キャンプでは、大阪大学の学生たちにも世界中の研究者がヒンディーのテキスト講読に打ち込む姿を実際にその目で見て、ヒンディー研究が人と人を繋ぐことを学んでほしい。コロナ・ウイルスの感染拡大が一日も早く終息し、無事に来年の夏あるいは再来年の夏には大阪で合宿が開催できることを切に願うばかりである。